

オーストラリア視察記録——セーフ・コミュニティ編

白石陽子 京都大学大学院医学研究科特定研究員 + 吉村晶子 京都大学大学院工学研究科特定研究員

オーストラリアは、心身への傷害の予防を通じて、住民のだれもが安全で安心して生活できるまちづくりを進める「セーフ・コミュニティ (SC)」活動が活発な国である。SC活動は、1980年代から世界的に広がっているが、同国はそのなかでもSC活動の歴史が長く、15のコミュニティがSCとして認証されている。アデレードには、このSC活動の推進拠点である「オーストラリア・セーフ・コミュニティ財団 (ASCF)」がある。このASCFの紹介により、私たちはアデレードの周辺の2つのコミュニティ (Mawson Lakes Community と Noarlunga Community) を訪問する機会を得た

私たちは、コミュニティを訪問する前に、ASCFにおいて財団の活動およびオーストラリアにおけるSC活動の状況について説明いただいた。ASCFは、南オーストラリア州政府のDepartment of the Premier and Cabinetに設置されており、全国のSC活動にかかわる専門家や実務家との幅広いネットワークのもと、コミュニティのSC活動支援およびSCの認証を行っている。

「文化を変える」ことが持続への道

今回、私たちの視察の依頼に快く対応してくださったのは、当財団のコーディネーターであるMeegan Botherton氏であった。まず、Botherton氏の案内により、ASCFの理事長Kim Tolotta氏と面談し、財団の現在にいたる経緯や組織体制、そして活用状況などについてご説明いただいた。

ここでは詳細な報告は割愛するが、ASCFは、幅広い分野の個人や組織のパートナーシップにより組織化され、2006年よりコミュニティの安全向上にむけた活動を展開しており、その活動の基本に「安全文化(safe culture)」の醸成を据えている。安全なまちづくりにおいては、歩道の改善など「見える」変化ももちろん大切だが、活動を持続的に推進するには「(安全)文化」を変えることが重要であるとしている。しかし、それは一晩でなしえるものではなく日々の積み重ねの結果であることから、ASCFではコミュニティ自身がそのための能力を育成できるよう、側面的に支援しているという。

今回、ASCFが紹介してくださったのは、世界で226番目にSCとして認証されオーストラリアで最も新しく認証されたMawson Lakes Communityと世界で14番目に認証されたNoarlunga Communityである。

仕事をコミュニティ内に作ることを基本に

Mawson Lakesは、アデレードの北12kmのSalisbury市にあり、Delfin Lend Leaseという土地開発会社と、南オーストラリア州およびSalisbury市により、共同で開発されている。

ここではたんに住宅開発だけでなく、ビジネスエリア開発、教育施設・商業施設・交通機関の整備などにより、コミュニティとしての機能を備えた開発が行われている。千葉県の茂原市と姉妹都市でもある。

コミュニティの規模としては、広さ約620ヘクタールに約4,000世帯が住み、人口は約12,000。そのうち学生が約7,000人である。Technology Park Adelaideの一角を担い、南オーストラリア大学Mawson LakesキャンパスもあるMawson Lakesでは、雇用機会もコミュニティ内で確保され、約5,000の仕事があるという。それは、コミュニティ内で仕事を作り出すことがその地域の経済的発展に不可欠であるとの計画段階からの認識のもと、現在も2,500のJob Projectsの展開によりテクノロジーパークや、大学で約4,000のポジションが確保され、また若い人にもtraining programsにより仕事のチャンスを与えるなど、活気のあるコミュニティづくりが推進された成果ととらえられるだろう。以下、今回の訪問で得られたそのような情報の概要を記すことにする。

コミュニティセンターは住民活動のCultural Hub

我々はその日、同市の姉妹都市委員会委員長であるAlan Peucker氏、およびMawson LakesのコミュニティセンターであるMawson Centre (詳細は後述) のLearning Development Coordinatorを務めるAnnie Payne氏にご案内いただきながら、Salisbury市長のGillian Aldridge氏も交えてコミュニティをご紹介いただいた。さらにその後、Delfin Lend Lease



▶写真1 コミュニティ図書館



▶写真2 図面を前にDelfin Lend Leaseの皆さんに教えていただく

社のMawson Lakes Project ManagerであるVince Rigger氏、同じくEducation/Community Service ManagerであるStan Salagaras氏、Landscape Consultation ManagerであるRobin Birch氏に、Mawson Lakesおよび他の同社開発事例について、図面を前に詳細なご説明をいただいた。

最初に、コミュニティのほぼ中央、Sir Douglas Mawson Lakeに面して建つMawson Centreを見せていただいた。大学・学校や事務所、店舗からすぐ歩いて来られる場所にあるコミュニティセンターであり、文化、教育に関する活動拠点として、またその情報アクセス・発信拠点として、住民活動のCultural Hubとなっている。

センター内の施設としては、市とMawson Lake Schoolが共用するコミュニティ図書館があり、学生や生徒のほか、お年寄りや子どもなど、幅広く近隣住民に利用されている。書架は可動式となっており、20分もあれば閲覧室の書架を奥の部屋に移動してシャッターを閉め、閲覧室をオープンスペースとして使うことができる【写真1】。実際、休館日にはイベントホールやギャラリースペース等としてよく活用されているとのことである。

その他、このMawson Centreには、南オーストラリア州の水資源に関するレクチャー等が行われる収容定員255席のシアター、複数の教室や会議室、展示スペース、カフェ等があり、市民の多様な活動と交流を支える空間として工夫されている。

「コミュニティをdeliverする」発想

上述したの3名のDelfin Lend Lease社の技術者には、コミュニティ開発のプロセスや手法、取り組みについて教えていただいた。同社は50年の実績をもつ全豪にまたがる土地開発会社であり、人生を楽しむ「Special Places」を提供するため、たんに居住の場を提供するのではなく、「コミュニティをdeliverする」という発想で取り組んでいる【写真2】。

オーストラリアの都市部は、我が国とは異なり、依然として人口が右肩上がりに増えるフェーズにあるため、鉱山跡地や農地、荒地などに、一から線を引いて新しいまちづくりを始めるプロジェクトが今も国内各地で展開されている。同社の技術者たちによると、そのような開発プロジェクトを開始する際に最初に行うのは、village briefと呼ばれる検討である。例えば、



▶写真4



▶写真3 プロムナードと学校、芝生、見通しのよく剪定された樹木が一体的にデザインされた空間

landscaping point of viewからの検討や、engineering point of viewからの検討のように、多角的な視点からのレビューを実施し、それらをもとに全体のビジョンをかためる。

次に行われるのは、ROAD (Risk & Opportunity At Design) reviewと呼ばれる一連のワークショップである。地域安全、都市計画、警察、保健、教育、市場、商産業、子どものケア等々の多様な分野の専門家と行政関係者、周辺住民とが一堂に会して、コミュニティのdesignのあり方を徹底的に議論するのだという。その際にはさらに、次に実施するフェーズで、例えば大学の研究と連動させるとよりよい結果が効果的・効率的に得られそうな見込みがあるなどの場合、この段階から大学と協働する枠組みの構築に取り組む。

温かく見守る目を重視した都市デザイン

最後に、コミュニティ内をAlan Peucker氏のご案内でみせていただいた。印象的であったのは、「見守りの目」がいつもあるコミュニティづくりであること、またそれを空間的にも展開することによって安心感のあるこちよい空間デザインが実現されていることであった。例えば、学童が通る道を一般市民もよく通るような動線と重ねることによって、いつも人の目がある場所にするという配置のデザインにすることで、学校のグラウンドの周囲にフェンスをめぐらせることなく安全を確保し、それによって広々とした開放感のある空間を実現していた。そういう空間デザイン上の効果、あるいは街路樹や植え込みは地上1m以内の枝を落として見通しをよくするなどの詳細デザインが、その空間全体のデザインを同じ発想でまとめることを支えているところには、優れたデザインの事例としてみるべきものがあった【写真3】。

また、住民が常にコミュニティに出てくる工夫として、使いやすい公園・公共施設、歩きやすい道路などを用意するほか、Walking School Busという登校方式を地域の人びとが実践している。子どもたちが登校する際に、大人2人が子どもの列の前と後ろを見守りながら歩く取り組みはすばらしいと思った。ハード面においても、子どもの下校時間は横断歩道の信号の

「青」の時間を長くする、ソーラーパワーを活用して街を明るくする、シンボルである池は淵から3mまでは深さを60cmにして溺水を防ぐ等々のきめ細かな配慮がなされていた。

住民サービスを一元的に提供する 関連施設が一つのエリアに

Mawson Lakeに続いて2日目には、アデレードから南25～40kmに位置するOnkaparinga市（人口約16万）の一地帯であるNoarlunga Communityを訪問した。Noarlunga Communityは、1996年にSCとして認証されて以来、積極的にSC活動を推進して実績を積み重ねており、先に訪問したMawson Lakeとは異なるさまざまな側面を見ることができた。

Noarlunga Communityに向け、アデレードから車を南に走らせ1時間程度で到着したのは、「Noarlunga Health Village」と掲げられた看板の前。「Noarlungaは、村（Village）だったかな」と思いつつ看板を眺めていると、私の疑問を察してか、保健・医療・福祉に関するサービスを一元的に提供できるよう関連施設が1つのエリアにまとめられているから「Village」と教えてくださった【写真4】。

さっそくSC担当のSteve Parker氏（州のコミュニティ安全コンサルタント）とTess Byrnes氏（ポピュレーションプライマリヘルスケアの看護部長）から、SCに取り組んだきっかけやこれまでの経緯についてお話いただいた。ここでは、これまでの数々の取り組みを一つずつ取り上げることはできないが、現在進行中の取り組みをいくつか紹介する。なかには、「労働者のうつ対策」のように日本と共通した取り組みもあれば、文化や価値観の違いを実感させられるものもある。

例えば、近年オーストラリアの若者の間では刺青やボディピアスが流行していることを受け、「安全な刺青」や「安全なボディピアス」に取り組んでいるという。これは、刺青やボディピアスをする若者ではなく、サービスを提供する側（業者）の安全と健康を確保することを目的としているという。刺青もボディピアスも施す際に出血を伴うため、HIV感染などの危険がつきものである。そこで、まず事業者を対象に調査を実施したところ、安全に関して十分な知識がない事業者が少なくなかった。そこで、事業者には刺青などを施す際に手袋をはめることが感染予防につながるなどの情報を提供し、講習会を開催している【写真5】。

また、オーストラリアのアボリジナル・アーティストとの共同による、子どもを対象とした安全教育も積極的に展開している。これらは、いずれも日

本では見られない取り組みである。しかし、地域の健康・安全課題を的確に抽出し、既存の社会資源を活用しつつプログラムを開発・実践し、その成果を科学的に測定し客観的

に評価するという、このSCの基本的アプローチは、各国のSC活動とも共通している。そのため、コミュニティにおける長年の経験をもとに、国内だけでなく東南アジアなど国外のSC活動も支援しているという。



▶写真5

地域の社会資源を活用しつつ 課題に対応する仕組み

主な取り組みについてご説明いただいた後は、Noarlunga Health Village (NHV) および隣接している保健・医療施設を案内していただいた。カウンセリング、歯科医院、精神保健センター、保育施設そして病院など多様な保健医療サービスがここで一元的に提供できるようになっている。NHVは、Noarlunga Health Services (NHS) が提供しているサービスの一つである【表1】。Noarlunga Health Services (NHS) は、1985年にRegional Community Health Serviceとして設立され、その後医療、メンタルヘルスなどのサービスが加えられ、現在は【表1】にあるサービスを提供している。

上記サービスのなかでも興味深いのは、行政と民間事業者の共同で運営されている病院であった。この病院は、1つの建物の中に民間事業者によって運営されている診療科目がある一方で、ビジネスとして成り立たない診療科目などは行政が担当しているという。また、そのすぐ先には、先住民（アボリジナル）専用の病院もある。

このように、さまざまなサービスが1か所に集められているため、地域の住民は、ここにさえ来れば適切な保健医療サービスを受けることができるようになっている。さらに、医療・保健サービスを受けている間に子どもを預かってくれる保育

施設もあると聞き、住民を中心に据えたサービス提供の仕組みが構築されていると感じた。

以上、2つのセーフコミュニティを視察したが、それぞれのコミュニティの背景も、抱える課題、アプローチも異なる。そのなかで、共通していたのは、地域の社会資源を活用しつつ課題へ対応する仕組みを構築し、その取り組み成果について、客観的データをもとに分析する仕組みを確保している点であろう。

▶表1

1. 医療サービス

- (1) Noarlunga Public Hospital
- (2) Noarlunga Private Hospital
- (3) Southern Mental Health (Morier)
- (4) Allied Health

2. コミュニティベース（保健）サービス

- (1) Noarlunga Health Village
- (2) Southern Women's Community Health Centre
- (3) Morphett Vale Community Health Centre
- (4) Southern Vales Community Health Centre
- (5) Community Care Team (Mental Health)
- (6) Mobile Assertive Care Team (Mental Health)
- (7) Community Mental Health Service